

PLUTARCH'S
LIVES

Takashi Atoda

阿刀田高

プルタークの
物語〈上〉

潮出版社



江苏工业学院图书馆
藏书章

ΠΕΡΙΚΛΗΣ
ΣΑΝΘΙΠΠΟΥ
ΑΘΗΝΑΙΟΣ

YUT.M

PLUTARCH'S
LIVES

Takashi Atoda

プラタークの物語 へ上

2008年7月5日 初版発行

著者 阿刀田 高

発行者 西原賢太郎

発行所 株式会社 潮出版社

〒102-8110 東京都千代田区飯田橋3-1-3
電話 03-3230-0781(編集)

03-3230-0741(営業)

振替口座 001501561090

印刷・製本 大日本印刷株式会社

©Takashi Atoda 2008. Printed in Japan

ISBN978-4-267-01801-5 C0093

<http://www.usio.co.jp>

落丁・乱丁本は小社営業部宛にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えます。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複製(コピー)することは、

法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の

権利の侵害となりますので、その場合は

あらかじめ小社に許諾を求めてください。

阿刀田 高 (あとうだ たかし)

1935年東京都生まれ。早稲田
大学文学部卒業。76年『冷蔵庫より
愛を込めて』でデビュー。79年『来
訪者』で日本推理作家協会賞、同年
短編集『ナポレオン狂』で直木賞を
受賞。日常生活の裏側を垣間見る
独特のブラックユーモア、そして
ギリシャ神話やシェイクスピア劇
などを平易に読み解いた作品に定
評がある。95年『新トロイア物語』
で吉川英治文学賞受賞、2003
年紫綬褒章を受章する。現在、日本
ペンクラブ会長、直木賞選考委員。

PLUTARCH'S 351903
LIVES
Takashi Atoda
阿刀田高

プラタークの
物語〈上〉

プルタークの物語へ上 目次

第1話	アテネを創ったテセウス	7
第2話	ローマを創ったロムルス	35
第3話	アテネの立法者ソロン	63
第4話	栄誉を求めたテミストクレス	93
第5話	尊大な民主主義者ペリクレス	121
第6話	先送りの人ファビウス	151

第7話 カメレオンの英雄アルキビアデス 181

第8話 母には弱い猛将コリオラヌス 211

第9話 テーベの英雄ペロピダス 241

第10話 口からジャブを飛ばした大カトー 271

第11話 ママの宝石はグラックス兄弟 299

第12話 善悪けた外れのスラ 327

人物紹介 358

木村裕治^{装丁}
金田一亜弥^{装画}
村上豊
(木村デザイン事務所)

プ
ル
タ
ー
ク
の
物
語
へ
上
へ

第1話

アテネを創ったテセウス

「子どもがほしい」

血の繋がった後継者を望む心はいつの時代でも変わらない。

ギリシャの古邑アテネは古くからアッティカ半島の中心地として多くの人々を集めていたが、この地の有力者アイゲウスには子どもがなかった。

「どうせ種なし男だろ」

と人々に侮られ、弟たちには、

「先行きは暗いぞ」

リーダーの地位を狙われていた。

悩みぬいたすえ、アイゲウスはデルフォイに赴いて神託をあおいだ。

「どうか子どもに恵まれますように。駄目でしょうか」

すると、

「アテネに帰り着くまで革袋^{かわぶくろ}から出ている脚^{あし}を解いてはならない」

と、これが神^{おぼしめ}の思召^{おもしめ}である。

デルフォイの巫女^{みこ}が下す神託は古くからギリシャにおいてもっとも權威のあるものとされていたが、ほとんどの場合わかりにくい。とかく誤解^{まね}を招く。

アイゲウスについて言えば……当時、酒を入れる獣革の袋には脚がそのままついていて、それが注ぎ口になっていた。だから神託は、とりあえず「アテネに帰り着くまで酒を飲むな」と解するのが妥当^{だとう}のように思えたが、アイゲウスは釈然^{しやくぜん}としない。

帰路トロイゼンに立ち寄り、この国の王であるピッテウス^{*2}に疑問を漏^もらした。トロイゼンはサロニコス湾を挟^{はさ}んでアテネと対峙^{たいじ}する町で、アテネとは親しい交流があったにちがいない。ピッテウスは知恵者として知られ、この一族は娘たちを優れた人に嫁がせ、息子たちを各地のリーダーに据^すえて相当な勢力を保持していた。

アイゲウスに相談され、ピッテウスがどう考えたか、つまびらかではない。ただ「りっぱな子がほしい」と訴えたのに対して「アテネに着くまで酒を飲むな」という答えがあったのだ。酒なんか飲んで女と交^{まじ}わったら、ろくな子が生まれない。だから……ピッテウスは（おそらくアイゲウスに酒を飲ませることなく）自分の娘^{*3}アイトラをアイゲウスの寢所^{しんじょ}に向かわせた。

そしてアイトラーはめでたく身籠^{みごも}る。

それを知ったアイゲウスは近くの洞穴に剣と靴とを隠して大きい岩でびったりと塞^{ふさ}ぎ、そのうえでアイトラーを呼んで、

「息子が生まれて成長し、この岩を動かして中のものを取り出せるようになったら、それを持たせて私のところへ寄こしてくれ。だれにも気づかれないようにな」

と言に残してアテネへと帰っていった。アテネではアイゲウスの後継を狙う者たちが目を光らせていたから迂闊^{うかつ}に子どもの誕生を明かすわけにはいかなかったのだ。

こうして生まれたのが後にアテネの英雄となるテセウス^{*4}であった。トロイゼンの王ピッテウスは娘の産んだ子を海神ポセイドンの子だと称して大切に育てた。

——これでいいのだ——

娘に強い子を産ませる、一族のいつも通りのやり方であったにちがいない。

当時、男の子が少年に達するとデルフォイの神殿に詣^{もつ}でて前髪を神に奉納^{ほうのう}する習慣があった。テセウスもこれをおこない、そのことからこの髪型を……前髪をスッポリ刈り落とした髪型をテセウス型というようになったとか。長い前髪は戦場で敵につかまえられやすく、それゆえにこれを切っておくほうがよいとされていたのだが、テセウス型は戦場の髪型を採ることによりあらかじめ勇者の誇^{ほこ}りを表すもの、と考えてよいだろう。

テセウスは幼いときからすでにして人並み外れた知力、体力、胆力^{たんりよく}を周囲に示して驚か

せた。

——こりや、すごい豪傑だぞ——

やがて成長して、くだんの洞穴の前に連れて行くと、やすやすと岩を動かして剣と靴とを取り出す。そして父アイゲウスの住むアテネへと向かった。

母親たちは安全な海路に行くことを勧めたが、テセウスはあえて山賊や乱暴者がはびこる陸路を選ぶ。ギリシャ神話きつての英雄へラクレスに[＊]あこがれていたからだ。あちこちで怪物や悪者を退治して人々を助けたへラクレスのエピソードはよく知られていたから、

——俺もあになりたい——

さらに言えばへラクレスとテセウスは母親が従姉妹同士、つまりテセウスにしてみれば英雄が又^{また}従兄に当たるのだから^{ひる}怯んではいられない。

——負けるものか——

青雲の志を胸に正義を求めて旅立ったのである。

陸路はサロニコス湾にそって西から東へと行く。まずエビダウロスで棍棒男と戦って倒し、棍棒を奪って自分の武器とした。コリントス海峡のイストミアでは松曲げ男に出会った。こいつは旅人を二本の曲げた松の木に縛りつけ、次に縄を切って……バヒューン、二股裂きにする。それが得意技だ。テセウスは逆に相手を松の木に縛りつけ縄を切ってバヒューン、犯^{おか}した罪の報^{むく}いを受けさせてやった。もちろんこんな殺し方に若いテセウスが慣れているはず

はないのだが、初めての体験でもみごとにこなしてしまうところがテセウスの凄さである。

「天分は練習に勝る」とプルタークは評している。「努力に勝る才能はなし」の反対だ。人生を冷静にながめた良識家は、良識家であるがゆえに努力ではどうにも追いつかない才能の存在を知っていたのだらう。

が、それはともかく、この松曲げ男には美しい娘がいて、娘はテセウスの豪腕ぶりを見て恐れをなし、逃げて深い繁みの中に身を隠した。娘は繁みのとげ草に、

「私をうまく隠してくれたら、この先、あなたたちを踏みつけたり焼いたりしないわ、絶対に」

と告げて誓った。

テセウスがあとを追ってきて、

「娘さん、ひどいことをしないから出ていらっしやい。さ、ここへ」

やさしい声をかけるものだから娘は繁みの奥から現れ……ここで、まあ、恋愛が成立。娘は身籠って男の子を産む。テセウスは、その後この女をほかの男に譲ったりして、

——これって、ひどいことじゃないのかなあ——

なんて与太はともかく、この子孫は繁栄し、子孫たちは先祖の誓いを誠実に守ってけつして野の繁みを踏みつけたり焼き払ったりしなかったとか。

話を戻してテセウスはサロニコス湾ぞいの旅を続ける。クロンミュオンでは獐犇な白い牝

猪を退治し、メガラの海岸では亀飼いの男に声をかけられた。

「おい、俺の足を洗って行け」

こいつは岩壁の上で旅人に自分の足を洗わせ、その最中に蹴落として海に住む大亀の餌にする事で知られていた。テセウスは、

「あいよ」

と答え、相手の足をつかんで海へ投げ落とした。

エレウシスでは旅人に相撲を挑んでは殺してしまう男と組み合つて殺し、ヘルメウスでは寝台男を引き伸ばして殺した。こいつは旅人をベッドに休ませ、ベッドが大きければ旅人の体を引き伸ばし、小さければ無理に縮めてしまう。テセウスは、

「お前にはベッドが大きいな」

乱暴者をグ、グイと引っ張ってベッドと同じ背丈にしてやったわけである。相手の悪業と同じ方法でこらしめるのはヘラクレスの方法であり、テセウスがそれに倣ったことは疑いない。

こうして道中の乱暴者を次々に葬って行ったものだからアテネに近づくにつれテセウスの噂が広まり、収穫の女神の子孫に厚く遇せられたり、アテネではアイゲウスの屋敷に入ることが許されたりするようになった。

折も折、アイゲウスの屋敷には暗雲が立ち籠めていた。後継者が決まらず弟や弟の子ども

たちが露骨に後釜を狙っている。加えてアイゲウスの新しい妻メデシア^{*6}の様子がどことなく怪しい。信頼がおけない。

^{*7} このメデシアはギリシャ神話でよく知られた女傑であり、とりわけギリシャ古典劇の偉才エウリピデスの戯曲「ヘメディア」は天下の名作だ。日本でも蜷川幸雄さんの演出でしばしば上演され好評を博している。

戯曲「ヘメディア」のストーリーは……アテネの北の港町イオルコス^{*}の王子イアソンが黒海の果てまで金の羊毛皮を取りに行き、現地の王女メデシアの助けを借りて目的を達成する。メデシアを妻として連れ帰ったもののイアソンの心変わりが明らかになってしまふ。メデシアは薬草を……毒草を使うすべを知っている恐ろしい女だ。イアソンとの間にできた二人の子どもを殺してイオルコスを逃れ……言ってみれば、その後日談としてアテネの有力者アイゲウスのもとに身を寄せていた、という事情である。アイゲウスには得意の薬草を用いて、「子どもを作る体にしてあげるわ」

という触れこみであった。

メデシアは客人としてアイゲウスの屋敷に現れたテセウスを見て、

——この若者、気に入らないわ——

直感的に正体を察したようだ。年老いたアイゲウスを唆し、

「盃に毒を入れましょうよ」